慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	P. A. ソローキンの社会移動論とその再検討
Sub Title	P. A. Sorokin's social mobility study and its reconsideration
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao) 鹿又, 伸夫(Kanomata, Nobuo) 熊田, 俊郎(Kumada, Toshio) 阿久津, 昌三(Akutsu, Shozo) 片山, 龍太郎(Katayama, Ryutaro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1982
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.22 (1982.) ,p.87- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000022-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

P. A. ソローキンの社会移動論とその再検討

P. A. Sorokin's Social Mobllity Study and its Reconsideration

川合隆男 *Takao Kawai*
鹿又伸夫 *Nobuo Kanomata*
熊田俊郎 *Toshio Kumada*
阿久津昌三 *Shozo Akutsu*
片山龍太郎 *Ryutaro Katayama*

This paper refers to a rereading of P. A. Sorokin's book, Social Mobility, 1927 (Social and Cultural Mobility, reprint edition, 1959), and reconsiders why his social mobility study stlil gives the impression of modernity after nearly fifty years. We examine the following four points about this classical study, (1) its comprehensiveness or synthesis in contents and methodology, (2) its problems and its re-evaluation, (3) its relative position in the history of social mobilty studies, and (4) its influences on the social mobility studies in Japan. Especially in this paper, we focus on (1) and (2).

〔I〕 はしがき
〔II〕 P・A・ソローキンの社会移動論（一）
〔III〕 P・A・ソローキンの社会移動論（二）
〔IV〕 P・A・ソローキンの社会移動論の再検討

〔I〕 はしがき

Pitirim A. Sorokin の *Social Mobility*, N. Y., Harper, 1927（後に彼の著 *Social and Cultural Dynamics*, 4 vols, 1937-41 のうち，第4巻からの一章を付録として付け加えて，Social and Cultural Mobility, N. Y., The Free Press, 1959 にリプリントされて出版された）は，50余年を経て今なお注目されるべきであると考える[1]。この著は移動研究の一つの古典であると共に，社会移動研究における領域・内容・研究水準・方法・地平の転換や模索という動きとも関連している。ソローキン (Pitirim Alex and rowitsch Sorokin, 1889-1968) の社会学，歴史や歴史哲学に関する著作は厖大であり[2]，ここでは彼の社会移動論についてのみ次のような四つの論点を中心に考察してみたい。

すなわち，(i)第二次大戦後の社会移動研究において大きな刺激を与えたイギリスの G. V. Glass がソローキンの社会移動論を「依然として社会移動の唯一の包括的研究である」といい，安田三郎が「社会移動という新しい概念を採用して一つに総合したのは，彼の功績であった[3]」と評した，その包括性，総合の内容はどのようなものであったのか，(ii) 彼の移動論の問題点の指摘と同時に，今日の状況からしてどのように再評価し得るのか，(iii)更にその包括性，総合性の故に，移動研究史においてしばしばソローキンを以って出発点としがちであるが，逆にソローキンの社会移動論とそれが書かれた歴史状況と，より大きな，長い研究史と歴史的展開のなかでどのように相対視していくことができるのか，(iv)また1928（昭和3）年の林恵海「ソローキン氏の社会的流動に関する研究[4]」においていち早く紹介批評がなされていたように，大正期，昭和戦前・戦中期のわが国社会移動研究と戦後の移動研究との間の連続と断続をどのように把握すべきなのか，といった諸点に言及していきたい。ここでは，特に (i)，(ii) を重点にして考察していくことにする。

〔II〕 P.A.ソローキンの社会移動論（一）

ソローキンの社会移動論の著書は1927年版と1959年の

再版とでは，後者では初版にあった F. S. Chaptin の紹介文，Sorokin の序文，それに人名索引がはぶかれていることと目次のスタイルが少し変っているだけで，内容的にも，頁数等においても全くのリプリントであるので，ここでは手に入れ易い再版本でみていくことにする。

本論での課題設定に照らして，まずソローキンの社会移動論における包括性，総合の内容はどのようなものであったのかを，丹念に読み取っていきたい。Social Mobility, 1959 の内容は，序論，6部22章，付録からなり，645頁に及ぶものである。目次は次のとおりである。

Introduction

I Social Space, Social Distance, and Social Position

II Social Stratification

Part One; The Fluctuation of Social Stratification

Part Two; Social Mobility

Part Three; Population of Different Social Strata

Part Four; Fundamental Causes of Stratification and Vertical Mobility

Part Five; Present-Day Mobile Society

Part Six; The Results of Social Mobility

Appendix: Social and Cultural Dynamics

序論，第1部から第4部までは，まず社会的空間，社会的距離，社会的地位，社会成層，社会移動の概念，そして社会移動の諸相についての一般的考察が展開され，第5部と第6部では「今日の西欧社会」における移動社会の諸特徴，社会移動がもたらす影響について論じている。

本書の序論は主に中核となる概念用語の定義にあてられている。「上流階級と下層階級」，「社会的昇進」，「某氏は立身出世の人」，「彼の社会的地位は大変高い」，「右派と左派」，「社会的距離に大きな隔たりがある」といった表現は，社会的空間 (social space) にかかわるものである。この社会的空間は，幾何学的空間とは全く異なるものであり，人間的世界における空間である（生活界)。そして，ある人間の家族の地位，国籍，宗教集団，職業集団，政党，経済的地位，人種等々といった，具体的な位置づけの，「準拠点として選択された他の人々，あるいは他の社会現象との彼の（その）関係」(his or its relations to other men or other social phenomena chosen as the "points of reference") (p.4) による，その人の社会的地位 (social position) である。社会的地位は諸関係の全体性である。ここに「準拠点」といった考えを関連づけることによって，ソローキンの定義の曖昧さと共に，心理的・主観的，社会的・客観的，文化的な地位概念，移動概念を内包した含意を読みとることもできる。

更に社会的空間は多くの複合的な次元をもっているが，ソローキンはこれを垂直的次元 (vertical dimension) と水平的次元 (horizontal dimension) という二つの原則的な次元に区分する。人々の社会的空間，社会的地位には，階統，序列，支配と服従，権威と従順，昇進と下降等を伴い，水平的・垂直的に分化され社会成層 (social stratification) を形成している (p.8)。社会移動はこうして位置づけられた二つの原則的な地位軸における諸個人の移動にほかならない。ソローキンの移動論では，全体的社会構造を特徴づける社会成層と社会移動（特に垂直移動）とが相互に関連づけられて論じられていることも一つの大きな特色である。

序論の第2章および第2部は，ソローキンの移動の一つの重要な骨格である社会成層の概念と定義，社会成層の変動（波動）をあつかっている。社会成層は，階統的に層化された階級（区分）への人々の分化を意味し，ソローキンによればその諸形態として三つの原則的な成層，すなわち，経済的成層，政治的成層，職業的成層に区別される。現実にはこれら三つの成層は相互に連関し重複するものであるが，分析的には別個に研究される。そこでは，われわれの営む社会生活が比喩的にいわば社会成層の視座から生きた「社会的建造物」にたとえられる，その外形や外部構造，内部構造を量的，質的に解明を進めていく手順である。従って，いかなる社会にとってもその「建造物」が灰燼に帰してしまわぬ限り，社会成層はさまざまな変異はあり得ても「永続的な特徴」である (p.12)。特に第二部では社会成層の変動（波動）が，社会成層（社会的建造物）の外部構造の高さと外形 (the height and profile) の変化として数多くの歴史的資料，統計資料を用いて分析されている。経済的成層（第3・4章)，政治的成層（第5章)，職業的成層（第6章）のいずれの変動をみても，一定の明確な傾向，進歩は見い出しにくく，成層化 (stratification) への諸力と平等化 (equalization) への諸力との間の葛藤が波動的に存続しているとみるべきであるとする。前者の力は永続的に，間断なく作用するのに対して，後者の力は時折に，激動的に，暴力的に作用する。こうした命題，結論，およびその導き方も極めて示唆的であると共に，批判の向けられるところでもある。

さて，第2部および第3部では，たとえていえば多層化された社会的建造物の中の内部構造，階上と階下・階内部の移動，通路・経路，メカニズム，階毎の住民の特徴等に眼が向けられていく。第2部は，本書を貫く基本テーマである社会移動に関する諸概念が展開され，3つの章よりなるが，まず第7章 (Social Mobility, Its Forms and Fluctuation) で社会移動の基礎的概念を提示し，第8章 (The Channels of Vertical Circulation) では社会移動のうちの垂直移動の経路について論じ，最後に第9章 (Mechenism of Social Testing, Selection, and Distribution of Individuals within Differet Social Strata) で垂直移動の過程を統制するメカニズムである社会的試験 (social testing) の問題を扱てっいる。

まずソローキンは，社会移動を次のように定義する。「個人ないし社会的事物あるいは価値の，ある社会的地位（位置）から他の地位へというなんらかの推移を，社会移動と理解する」(p.133)。ソローキンにあっては，社会的位置の構造的布置 (a configuration of social positions) は所与のものであり，それが社会構造として措定されている。その社会構造が座標軸として設定され，その中を個人や事物（自動車など）や価値（宗教やイデオロギーなど）が動いて行くというのが，彼の社会移動についての基本的イメージである。ただし，本書では，移動を論じるに際して主に諸個人の移動に焦点をあてている。

社会移動には2つの類型があり，1つは水平移動，もう1つは垂直移動である。水平移動は，同水準での社会集団間の移動である。たとえば，バプティストからメソジストへといった教団間の移動，あるいはアイオワからカルフォルニアへといった地理的な移動が含まれる。垂直移動は，或る階層から他の階層へといった階層間移動である。この垂直移動には，上昇 (ascending) と下降 (descending) と2種類の移動がある。

社会移動の量的側面は，集中性 (intensiveness) 及び一般性 (generality) の二側面から検討される。集中性とは，個人が移動に際してとびこえる階層の多さであり，一般性は，社会の中で，移動する人がどのくらい多いかを示す概念である。支配者から構成される上層と，被支配者から構成される下層があることは，人間社会の普遍的現象である。民主的社会は，この階層構成が平準化して社会構造がそれ以前と変わったものではなく，ただ移動性が高くなったものである，と彼は述べている (p.138)。

個人はむやみに上下移動するわけではなく，しかるべき経路を通って移動する。これが第8章のテーマである。この移動経路 (channel) は，様々な社会制度がその役割を果すわけであるが，その例として，軍隊・教会・学校・政治組織・専門職組織・営利組織などを挙げることができる。

ソローキンの表現には，問題点も多いが，垂直移動の経路は，時代により，また社会によりその重要性が異なっているという点が指摘されている。

こうした経路は，無規制で人を通過させるという性質のものではない。この移動を規制するメカニズムを社会的試験のメカニズムと呼ぶ。これが次の第9章のテーマである。すなわち，階層の上昇に制約があるということは，階層間の移動にふるいの原理が働いていることになる。このふるいが，垂直移動の過程を統制するメカニズムである。このメカニズムには3つの働きがあって，①個人が一定の社会的機能を果すのに適しているかをテストし，②一定の社会的地位のために個人を選抜し，③異なる社会階層間に人員を配置する，ことである。

社会移動の経路であった社会制度が，同時にこのふるいの役割を果している。このふるいには，学校や家族のように個人の一般的資質をテストするものもあるし，各職業組織のように，特定資質をテストするものもある。テストを血統 (family) にたよることがあるが，これは現代社会学の用語を用いれば，そのようなテストを採用する文化は，属性主義的であるということになろう。

社会的試験のメカニズムが適正に稼働し，適正な人員配置がなされるなら問題はないが，この人員配置にひずみが生じた場合，社会は不安定化すると，ソローキンは考えている。すなわち，上層内の過大な出産及び安易なテストの結果，上層内の人材が過剰になった場合，少ないポジションをめぐる闘争がみられ，社会は不安定化・無秩序化し，革命もおこる。逆に，上層内の過少な出産及び厳格すぎるテストによって，上層内の人材が過少状態の場合，政府の無能化・下層民の破壊活動によって，同じく社会は不安定化・無秩序化し，革命もおこる。

第3部は，社会内の諸個人の配置の諸特徴を，諸個人の肉体的・精神的特質の階層差から取り上げている。

第10章「異なる階層の人々の肉体的差異」(Bodily Differences of The Population of Different Strata) では，社会階層間の肉体的特徴の差異が，身長・体重・頭蓋容量・頭部の形・色素・容貌と体型などと階層的位置との関連から論じられる。このうちの多くのものは確かな科学的証明は得られてはいないが，身長と体重については上層階級のほうが下層に較べて，身長が高く体重が

重いという相関関係が認められる。

第11章「異なる階級間の生命力・健康の差異」(Differences in Vitality and Health of Different Social Classes) は，死亡率・生存率，体力測定から，階層間の生命力・活力の相違が検討される。上層階級は下層よりも，より長寿で死亡率が低く，また健康に恵まれ体力も備わっていることがデータから導かれる。さらにこれらの特質は，上層内の相続世襲ではない下層からの上昇移動をするには必須の条件で，この相関関係は永続的のようだとされている。つまり，上昇移動者も含めて社会的上層を占める人達は肉体的優越者であり，肉体的優越性という観点から見れば，いくつかの例外があるとしても，社会成層は生物学的成層体系と相関し，かつ一致することが導かれる (p. 268)。

第12章「社会成層と，知性，その他の精神的特性」(Social Stratification and Intelligence and Other Mental Characteristics) ここでも一般的知性は階層が上位ほど高くなり，知性の個人的分散と社会的地位が相関するとされる。このことは，肉体的発達と知的発達との相関，歴史上の天才を輩出させた人数の階層差，知能検査の結果の階層差などから確証が得られるとしている。

第13章「遺伝か環境か，淘汰か適応か？」(Heredity or Enviroment, Selection or Adaptation？) は，第10～12章で検討した肉体的・精神的特質の階層間格差の現象が，環境が原因であるのか，あるいは遺伝によるものなのかが論じられる。環境説が進歩的で信用を得ていた当時の世評とは逆に，ソローキンは極端な環境決定説はかえって階層を固定視する「反動的」理論であると批判する (pp. 330-331)。社会成層自体そして階層間の差異の少なからざる部分は，環境だけでなく遺伝の結果であり，同様に適応だけでなく淘汰の結果でもあると主張している。

第4部では，社会成層化の根本的な原因と垂直移動を引き起す諸要因が検討される。第14章「社会成層の根本原因」(The Fundamental Causes of Social Stratification) では，あらゆる社会にみられる社会的成層の普遍的原因は，(1)人々が一緒に生活しているという事実，(2)個々人の生得的相違，(3)個々人が置かれている環境の相違，であるとする (p. 337)。

(1)人々が一緒に生活し続けるには成員の行動と相互関係の組織化が必要であり，その結果成員は統治する者とされる者の階層に分化する。しかしこの要因だけでは，歴史上の顕著な社会的成層の型を生み出し得なかったであろう。この要因を条件として他の二要因が作用し社会的成層を形成する。

(2)その内の一つは個々人の生得的な身体的・精神的差異であり，これがいかなる社会集団においても指導者と被指導者，支配者と被支配者への分化をもたらす。

(3)いま一つは環境の差異である。これは二つの意味で社会成層を生み出す。第一に，たまたま好ましい環境にある者は，そうでない者よりも上昇する機会が大きい。第二に，環境の差異が身体的・精神的特質を変え後天的差異をつくり，それが生得的差異と同様成層を生み出す。

以上の要因をあげてソローキンは，社会成層の「自動的・自然的」(spontaneous and natural) 起源の理論とし，説明を大異変や様々な異常的要因に求める考えを批判する。なお，人々の生得的異質性や環境の差異の増大(減少)，個人間・集団間の敵意（連帯）の増大に貢献する条件は社会成層の増大を促進（抑制）する条件であり，促進条件の中で重要なのは，集団の規模の増大と成員の異質性の増大である。

第15章「垂直的周流の要因」(The Factors of Vertical Circulation) では，垂直的周流（流動）の主要因として，(1)人口学的要因，(2)親子の非類似性，(3)環境の変化，(4)個人の諸階層への社会的配分における不完全性が論じられる (p. 346)。

(1)多くの時代，社会において，上層階級は下層階級よりも出生率が低い。又，上層にある者の方が，戦争等暴力による死亡率がより高い。この結果，上層階級内に一種の“社会的真空”が出来，これを埋める為下層から人員の補充が必要となる。

(2)遺伝的要因と環境的要因が親子の能力差を生む。その結果，諸個人が占める社会的地位と，その地位の持つ機能達成に必要な先天的・後天的能力との不一致がおこる。これが大である程垂直的周流の必要性は大となる。移動の主要な方法は3つある。第一は予防的移動 (preventive shifting) 即ち社会的な試験・淘汰のメカニズムによるもの，第二は抑圧的移動 (repressive shifting) 即ちある地位の責務をこなせない者が社会的圧力によっておろされ，代わりに下層から上昇するというもの，第三は，自分に向いていない地位に生れた者が不満を持ち，自分の能力や性質に合うよう地位を改めようとする (personal efforts of improperly placed individuals) というものである。

(3)環境，とりわけ人類学的・社会的(anthropo-social)環境は常に変化している。ある条件，環境の下ではある地位に適している個人が，異なる条件・環境の下では

(例えば，地理的，風土的条件の変化，生産方法・習律・信念・科学や芸術・交通手段等の発明工夫，変化）適さないということがおこり，その結果，垂直的周流がおこる。

(4)以上の要因によって移動が必要となり又生ずるが，移動のメカニズムは必ずしも完全には作動しない。あらゆる社会は，各階層に不適切な人々が堆積すると，機能不全を起こし人々の不満が高まり，社会の衰微，異常な垂直的周流特に革命が起こる。革命が起こると旧上層階級は引きおろされ，代わりに革命のリーダーとして下層から有能な人々が上昇する。革命の第二期においては，彼らの内部に上層の機能を果しうる人々と再上昇した旧上層の有能な人々とにより，新しい上層階級が形成される。こうしたプロセスが歴史的にくり返されてきたのであるとされる。

〔III〕 P.A.ソローキンの社会移動論（二）

本書の前半部分にあたる序論，第1部～4部では，社会的空間と社会的地位，社会成層，社会移動，成層化と垂直移動の諸原因についてのソローキンの基本的な考えが展開されたが，後半部分の第5～6部では，特に現代の西洋社会にみる「移動社会」における移動の特徴，社会移動による影響が論じられる。

第5部は，18世紀後半以来，水平移動，垂直移動ともに増大しつつある西洋社会の分析にあてられている。

第16章「水平移動」(Holizontal Mobility) においては，垂直的な地位の変動とは別に個人，社会的事物価値の水平的流動についてとりあげられ，次に，職業内流動，家族間流動，市民権の流動，宗教間流動，政党間流動などの水平移動が，西洋社会においていかに動態的なものかを示すのが本章である。

まず第1に，現代の西洋社会は，過去の西洋社会および非移動社会と比較してみるならば，個人の地域的流動 (territorial circulation)，社会的事物・価値の流動が集中的にみられる社会である。このような現象は，伝統的な文化，習律，慣習などの価値を破壊し，また，鉄道，自動車などの交通手段の発達に伴い，社会的事物の急速な伝播が，発生・消滅を繰り返す社会のダイナミズムをあらわしている。

第2に，水平的な職業内流動について，アメリカ合衆国，ヨーロッパ諸国の転職率を比較することによって，西洋社会の水平的な職業内移動の集中性と不安定化の動態を分析している。

第3に，基礎的な社会集団としての家族の社会的機能についてとりあげ，離婚率，再婚率にみられる家族間流動は，家族制度の解体，家族の紐帯の弱体化をあらわすものであるとして，現代社会のひとつの特徴であるさまざまな紐帯からの「解放」がますます進行していることを指摘している。

第4に，その他の社会集団として宗教集団，政党などの水平的な流動をとりあげる。ここで興味深いのは，ソローキンが社会主義，共産主義を宗教のカテゴリーに含めていることである。また，教会と国家の分離，信仰の自由が，「現代文明の機械化的傾向」と結びついて，宗教間流動の累積的変動をもたらしてきたことを指摘している。

第17章「西洋社会の垂直移動」(Vertical Mobilty within Western Societies) においては，職業間・職業内の垂直移動の分析がなされている。まず第1に，西洋社会においては，父親から子供への職業の世襲的な移行の比率が，非移動社会と比較すると，低くなっており，平均20～60%の間を波動する (p. 418-419)。

第2に，職業の世代間移動に関しての世襲的な移行は，減少の趨勢にあること (p. 421)，すなわち，カースト社会が減少し，社会構造が柔軟構造をもつようになるととらえる。

第3に，生涯にわたる移動（世代内移動）の中で職業間流動の集中性が，職業集団（専門職，未熟練労働者，半熟練労働者，など），年齢によってどのような差異がみられるのかを検討している。異なる社会層が生涯の生活過程においてどのような職業移動類型をとるのかという新しい視点がすでに含まれている (pp. 424～428)。

第4に，父親と子供との職業の類似 (affinity) と差異が，階層によってどのような趨勢にあるのかが分析される。以上のような分析に関して，西洋社会は，(A)職業の分散の趨勢，(B)異なる階層からの職業の補充，(C)職業集団の内部の階層の複雑な絡み合いの特徴がみられるとしながらも，(D)職業の世襲的な移行，(E)父親と子供との職業の類似と差異による職業構造の固定化も現実であるとして，ソローキンは階級闘争論をある程度認めている (pp. 435-440)。

第5に，職業間・職業内の上昇と下降の波動が，現代社会の職業構造の特徴であり，また，戦争，革命などの大転換の時期をのぞいて，常態のもとでは，上昇と下降は漸次的に起こる。

第6に，職業移動は年齢，個人の能力によって速度が異なり，また，上層，中間層，下層の階層別についてみると，両極の職業階層に較べてより中間層が安定的であ

ると指摘している。

第18章「西洋社会の垂直移動」(続) においては，経済移動 (経済成層の移動) の分析がなされている。経済移動の波動を測定するための統計資料がないことを示唆しながらも，ソローキンは7つの仮説を提起している (pp. 466-479)。

(1)戦争，革命などの大転換の時期には，経済移動が増加する趨勢にある，(2)個人によって越えられる経済的距離が長くなるほど，上昇あるいは下降する者の数は少なくなる，(3)上昇あるいは下降方向のいずれの場合にも，経済移動は垂直的な経済成層の系列にしたがって漸次的に起こる，(4)職業移動と同様に，父親と子供との経済的地位が同一の場合には，中間層の経済的地位は，上層と下層の経済的地位よりも安定的である，(5)父親と子供との経済的地位が異なる場合には，最下層 (上昇)，中間層 (上昇・下降)，最上層 (下降) のパターンがみられる，(6)上昇と下降の経済周流は永続的に機能する，(7)西洋社会の経済階層は，父親と同じ階層に属する息子達のみならず，より上層，下層の生まれのかなりの数の新参者から構成される。このように現代社会の経済移動のダイナミズムを7つの仮説にもとづいて分析している。

第19章「西洋社会の垂直移動」(続々) においては，政治流動 (political circulation) の分析がなされている。まず第1に，政治流動 (政治的成層の移動) は，戦争，革命，大政革運動などの大転換の時期に集中的にみられる。革命の時のような無政府状態においては，社会淘汰と個人の配分のメカニズムが正常に機能しないために政治流動が急激に起こる (p. 481)。

第2に，常態においては，政治流動は漸次的に機能する。第3に，政治的地位の世襲は，非デモクラシーの無政府状態と同様に，デモクラシー社会においても，職業的・経済的地位の世襲よりも高いのではないかと，ソローキンは考える。

第4に，政治階層の成員の分散と補充について検討し，最後に現代社会において，政治移動の上昇の経路は，政党内の政治活動であるとする。

第6部はいわゆる「移動効果論」が論じられ，社会移動がここまで被説明変数として扱われてきたのとは逆に独立変数として取り上げられる (p. 493)。彼の移動効果論は，「垂直的周流」を独立変数としてその移動の影響・帰結を考察し，移動現象の持つ「機能」を発見しようとするものである。

第20章「社会の人的構成に与える移動の影響果」(The Effects of Mobility on the Racial Composition of a Society) では，激しい移動がその社会の人的資源を消耗すると論じている。上層階級の人間が下層よりも肉体的・精神的に優れており，かつ生殖率が低ければ，過激な垂直的周流は常に社会の最良の要素 (best element) となる人間を消耗してしまう，という。この人的消耗の過程は都市淘汰の過程でもある。社会的上昇の機会と経路が都市に集中していることから，地方から都市への移住が起こり，その際に農村からの移住者は都市の社会的淘汰機能によって社会的地位を配分される。都市は地方の人口を吸収し，上層階級はその下層階級の移住者の中から優秀な人材を補充するのである。この都市淘汰の地域移動過程は，階級的周流による人材の消耗過程と並行して進む。彼によれば，中世貴族制は18世紀末に崩壊し，その後の上層階級は農村からの新たな移住者によって補充されてきた。この補充は20世紀初頭には，プロレタリアや農民階級からの上昇移動者によって充たされるようになり，社会のより底辺からの移動によって補充されるようになった。以前より上層的地位の補充がより下層からなされるようになったのは，現存の上層階級が必要とされる機能を維持できないためであり，またそれは上層階級の差別出生力と移動の激しさによる人材消耗のためである。ソローキンはこれらのことから，優秀な人材の消耗が，国家・社会の崩壊を導くのではないか，といういわば激しい移動社会の悲観的人材枯渇論を述べるのである。階層間の生殖率の差は拡大すると考えられ，低出産と保健衛生的環境改善による低死亡という趨勢のもとでは，遺伝的に虚弱な要素の残存と増殖の機会が増大して「人種的悪化 racial deterioration」が起こり，人材的に消耗と枯渇が進行するというのである (pp. 498-503)。

第21章「人間の行動と心理に与える移動の効果」(The Effects of Mobility on Human Behavior and Psychology) は，移動の急激さが人間の行動と心理へ及ぼす影響を，羅列的に10項目に分けて検討される。移動社会では異なる考え方・価値・イデオロギーを持った人達との接触が増し，それが刺激となって精神生活と新しい価値の創造をもたらし，「知的生活を促す」。また，非移動社会のように一生同じ社会的位置に置かれることはなく，多くの位置を動くのでそれぞれの位置に対応した能力と柔軟性が必要とされ，「行動がより柔軟に多芸多才になり」，「発明・発見を促し」，「心の狭量さが減じられる」。

以上は移動のポジティブな効果であるが，逆の否定的効果も6つ挙げられている。極端な移動はその移動者本人に異なる社会階層の環境に適応する必要を強制させ，

「精神的緊張を増加させ」，また特定の職業・家族・宗教等と固定的に結びつけられる社会的絆を欠いてしまうために，親密さの感覚を喪失し「心理的孤独感を増す」。このことは，「自殺の増加」をもたらし「精神的疾病を促す」ことになる。激しい移動経験は習慣や道徳の内面化を妨げ「道徳の崩壊を促し」，精神生活を向上させる反面「知識の皮相性を促し，また神経系の感受性を鈍らせがちである」。知識の皮相性に加えて，多くの対立的理論・イデオロギーの混在のもとで「懐疑的態度と，確固たる信念の欠如とを助長し，その反面，大衆の突然の教条主義をもたらす」のである。

第22章「社会過程と組織における移動の効果」(The Effects of Mobility in the Field of Social Processes and Organization) では，全体社会の次元での組織化・秩序維持に焦点が向けられる。社会移動は機会の平等や選択の適切さが獲保されれば，諸個人の適切な配分を促進し，現に西洋社会においてはある程度の開かれた地位と平等な競争とが存在している。しかし，社会秩序や社会的安定への効果を考慮する時，移動はより適切な配分によって安定化をもたらす反面，これを破壊し，道徳の混乱や社会秩序の弱体化をももたらす事が指摘される。また，文化的複合体の連続性に対しても，発明・発見や知的生活の向上を生み出すのと反対に，移動の激しさによって人間が流動的になるために文化様式やその連続性が阻害・解体されてしまう。

〔IV〕 P.A.ソローキンの社会移動論の再検討

これまで〔II〕・〔III〕P.A.ソローキンの社会移動論(一)・(二)を通じて，彼の展開したその包括性，総合の内容がどのようなものであったのか，を改めて再考察してきた。移動現象に関連して扱われている内容は，i) 社会的空間，社会的地位，社会成層，社会移動の概念規定，ii) 社会成層の構造，経済的成層・政治的成層・職業的成層の諸相，iii) 社会移動の基礎的考察，類型，移動過程と移動メカニズム，iv) 階層の身体的・精神的差異，v) 成層化，垂直移動の原因，vi) 現代の「移動社会」にみられる社会移動の諸特徴と移動の影響（効果）等，にわたる広範なものである。

方法論的な視点からみても，a) K. Marx, E. Durkheim, R. Michels, R.E. Park, C.H. Cooley, W. Pareto, G. Schmoller, M. Weber, T. Veblen 等を始め，厖大な著者の文献渉猟，古代から現代に及ぶ極めて巨視的な歴史的資料考察，数多くの統計資料の活用にもとずく経験的実証的立場の重視，b) そうした立場を踏まえての一般的な理論命題化，仮設命題化の積極的な試み，c) 実証と理論の総合化，d) 比較研究の視座を推進しようとしていたといえる。19世紀後半から20世紀初頭の激動と新たな歴史的胎動の渦中で，ソローキンは，都市淘汰論，エリート周流論，職業移動研究の枠を越えて[5]，社会移動論の視座から，問題関心と方法論における二重の意味での包括化，総合化を図ろうとしていたといえる。更にソローキンの歴史観や世界観の位置づけや，評価はともかくとして，以上を通じて，巨視的に現代社会の動態的特徴をここでは「社会移動」論を軸に把握しようと意図していた，とみることができる。

次に，彼の移動論の問題点の指摘と同時に，今日の状況からしてどのように再評価し得るのか，に力点を置いて論及しておきたい。

序論および第一部では，特に社会的地位・社会成層・社会移動についての概念規定や一般論的考察にあてられているが，余りに巨視的な視座かさらまざま含意を内包した規定として一般化されて，歴史性を欠き，その構造的把握も上層・中間層・下層といった説明把握となりその区分基準・項目・尺度もきめて抽象化されて曖昧のものとなり，経済的成層，政治的成層，職業的成層も充分意味があり分析的には区別されるとしても相互の関連も明確にされていない。これは「移動社会」「非移動社会」という類型設定についても同様である。

第2部（社会移動）についていえば，社会移動を，個人 (an individual)，ないし社会的事物 (social object) あるいは価値 (value) の，地位（位置）の変化であると包括しながら，個人の移動と社会的事物，価値の移動との理論的関連が不明確なままになっている。付論として「社会的文化的動態論」(Social and Cultural Dynamics) が補われているとしても，依然明らかではない[6]。

ソローキンの社会移動論において，重点は垂直移動にある。だが，水平方向の座標軸と垂直方向の座標軸との区別も明確に画することはできないという問題もある。更にソローキンの構造分析における静態性という大きな問題点をも検討されなければならないだろう。ソローキンの移動論，特に垂直移動の場合，まず，階層構造が所与のもの，座標軸となり，次に，各階層の人員比も適正な一定値があると仮定されている。こうした把握は，成層化や垂直移動の根本原因論とも関連するところである。第3部の階層間における身体的・精神的差異に関する分析も，夥しい「事実」の列挙にもかかわらず，極めて静態的固定的分析にとどまっているといえるだろう。

第4部においてもソローキンは，各説明変数間の相互

関係や被説明変数への相対的な影響力の比重を明らかにせずただ並置してあるだけのことが多い。用いられている諸概念も，その内包が大きすぎたり，漠然として曖昧であることが多い。例えば「環境」という用語も断片的な例示が成されているだけで不明瞭である。又，二次的要因については，主要因を増減せしめるものという記述に留まっており，事実上何もいっていないも同然といえよう。成層化や垂直移動の原因をめぐるこの第4部の論議はそれまでの他の論議とも関係せしめられるべきである。

根底には，ソローキンの独特な巨視的な文明史観をもちながら，H. Spencer, E. Durkheim, V. Pareto, 高田保馬，J. A. Schumpeter 等と類似した機能主義的成層論[7]，移動論を展開したといえるし，成層化や垂直移動の永続的傾向や周流・流動 (circulation) の用語の強調の中にもそれが示唆されている。

第5部，第6部の今日の「移動社会」における移動の特徴，中間層論，移動の影響・効果のところでは，当時の移動研究の状況からしても断片的でもあるが豊富な仮説構成が試みられている。そして歴史体験や時代状況を反映して，さまざまの「紐帯」からの急激な解放や移動，人材枯渇，等に対する危惧や不安，時には憎悪，が示唆され，現代の教育に対する悲観や，民主主義・平等主義の神話化を指摘し，ところどころに彼のエリート主義志向や貴族主義志向が顔をのぞかせている。

以上ソローキンの社会移動論及びその問題点について言及してきた。確かに，特に機能主義的成層論，歴史科学についての認識，命題定立・仮説設定の諸方法等をめぐっては問題があり論争点でもあり，評価も分れるところである。

ソローキンの移動論以後，特に第二次大戦後に「機会均等」や教育制度改革，民主化といった実践的課題の要請もあって，移動研究は量的質的に著しく展開し飛躍的な水準に達してきたといえるが，逆に次第に技術的・方法論的問題関心に傾斜するあまりに移動研究の内実を制約しつつあるともいえないこともない。ソローキンのこの書が刊行されて間もない時点でその書評をした Andrew W. Lynd (Univ. of Hawai) は一つの注目すべき弱点として「資料の余りの広範さと一般化の包括性[8]（大ざっぱさ）」にあるとし，また人種問題に言及しないのは何故かという指摘をしていたが，A. W. Lynd の批判とは全く別に，ソローキンの移動論で意図された二重の意味での包括性・総合の視座を再評価し，吸収すべきでないかと考える。ソローキンが提起したさまざまの広範な問題領域や関心をいまだに充分活用していないのでないか。

K. U. Mayer と W. Müller が指摘しているように，ソローキンの社会移動論では，社会的建造物にたとえながら外部・内部の構造が相互に関連づけられて，社会成層論と社会移動論という二つの基本軸が結びつけられて展開されていたのに対して，第二次大戦後の移動研究の多くは両者を切り離して，社会移動，なかでも職業移動の研究に集中してきたといえよう[9]。経済的成層，政治的成層との関連，それらにおける移動の研究も軽視され，専門領域を細分し固定化してきたともいえる。

社会移動そのものの考察にしても，ソローキンの移動論は，移動主体と移動研究対象（移動主体としての個人と集団，対象としての個人・社会的事物・価値），移動類型（水平・垂直移動，地域移動，世代間・世代内移動，客観的・主観的移動，絶対的・相対的移動 等々），移動メカニズム，地位形成と移動経路，成層化の要因，移動過程，移動の影響（効果）等にわたる広い内容目録となっている。従って，現在の研究動向をこうした目録に照らして研究範囲や内容を再整理していく機能を果し得る。現在の研究範囲や水準を再確認するには必要な手続きでもある。また，ソローキンの移動論を社会的交換論の観点との関連でみていこうとする提案も示されている[10]。

彼独自の移動効果論という研究領域を提示した点でも注目されるべきである。特に21章の社会移動とアノミー現象，移動の激しさによる根こぎ (uprooting) 社会，22章の移動と社会的配分，経済的繁栄そして社会的安定，などを題材とした諸命題は今なお移動研究でしばしば取りあげられる仮説命題を構成している。しかし，J. H. Goldthorpe が現代の移動研究が移動に伴う随伴現象を無視してきたと主張するように，今日移動効果論は再び脚光を浴びてきたと言えよう。たとえば，鈴木広らは『コミュニケィモラールと社会移動[11]』において，ソローキンの移動効果論を参考に移動の地域定着への分離仮説と社会化仮説を検討している。このように従来の移動研究は，社会的安定あるいは社会解体への効果だけへの関心の集中から，地域定着化や生活様式などの新たな関心と領域が啓発されつつあると言え，またそれらの新たな研究動向はソローキンの移動効果論に含まれる諸命題が研究の手がかりとして活用されていると評価できよう[12]。

ソローキンの移動論では，経験的研究と理論的研究を相互に結びつけようとする積極的意図も明白であり，両者が分断されつつある状況は反省されなければならない

し[13]，実に豊富な仮説命題が提示されており，さまざまに活用していくことも必要であろう。また現代社会の動向を，そのまま単純に機会均等の拡大や平等主義，民主主義に現実に彩られるものではないとするソローキンの懐疑的で皮肉な視座（非成層化と再成層化，destratification and restratification）にも注目しなければならないだろう。

この研究ノートでは，はじめに課題設定した (i) ソローキンの社会移動論そのものの再考察と (ii) 今日の研究動向に照らしてのその再評価，という二点にしか論及できなかったが，J. H. Goldthorpe が階級論的視座から移動論を考察している試みのように，ソローキンの跡った歴史体験や当時の歴史状況，ソローキンの社会移動論を含めて，さまざまな社会移動研究史の系譜を複眼的にあらためて問い直し，それらを踏まえて課題を問い直す作業[14]，また林恵海「ソローキン氏の社流会的動に関する研究」という紹介批評を前後にさまざまになされていた戦前・戦中期の移動研究から何を学ぶかという課題[15]等についての検討は，他の機会に試みたい。

注

1) この「研究ノート」を共同で執筆するに至った経緯は，1980年度の大学院社会学研究科の「社会学特論」で社会移動論を中心としてP・A・ソローキンの移動論をとりあげ，一年間輪読討論したところに端を発している。このノートは，特論を履修した鹿又伸夫，熊田俊郎，阿久津昌三，片山龍太郎の諸君との共同作業によるものである。本論の執筆の分担は，〔I〕はしがき，〔II〕P.A.ソローキンの社会移動論(一)，〔III〕P.A.ソローキンの社会移動論(二)，〔IV〕P.A. ソローキンの社会移動論の再検討，以上の各節について全員の討論の上に，分担執筆したものである。
2) Philip J. Allen, ed., *Pitirim A. Sorokin in Review*, Duke Univ. Press, 1963. の巻末にソローキンの厖大な著作目録が収録されている。著書が35冊，論文数は90に及ぶ。
3) D. V. Glass, ed., *Social Mobility in Britain*, The Free Press, 1954, P. 5. 安田三郎『社会移動の研究』，東京大学出版会，1971. 551頁。
4) 林恵海「ソローキン氏のの社会的流動に関する研究」『社会学雑誌』第50号，1928年6月。
5) これらの動きについては安田三郎『社会移動の研究』1971年の付録「社会移動研究小史」に詳しい。
6) P. A. Sorokin, *Social and Cultural Mobility*, 1959, pp. 549-640, この点に関して，山本登は「…吾々は社会移動の主体を人間に限定し，これとの関連において第二次的に文化を問題とすべきである」と批判している。山本登「社会移動の概念」学芸研究1号（和歌山大学学芸学部），1950年，289頁。
7) こうした機能主義的成層論論は，理論的には特にアメリカ社会学の中で，Davis. K., and Moore, W.E., "Some Principles of Stratification", *Amer. Social. Rev.*, vol. 10, 1945, pp. 242-249, Parsons. T., "A Revised Analytical Approach to the Social Stratification," in R. Bendix and S. M. Lipset (eds.), *Class, Status and Power*, Free Press, 1953, pp. 92-129. などに引き継がれていったといえる。
8) Andrew W. Lynd, による書評。A.J.S., vol. 32, No. 5, March, 1928, p. 847. A. W. Lynd は，Middletown, 1929，を書いた Robert S. Lynd & Helen Merrell Lynd とは異なる人物である。尚，このソローキンの業績を無視した書評をめぐるいきさつと顛末については，P. A. Sorokin, A Long Journey, 1963, pp. 225-229. に詳しい。
9) K. U. Mayer and W. Müller, "Progress in Social Mobility ?", (1971), in A. P. M. Coxon and C. L. Jones (eds.), *Social Mobility*, Penguin Education, 1975, pp. 169-185, J. H. Goldthorpe, *Social Mobility and Class Structure in Modern Britain*, Clarendon Press, 1980, p. 1.
10) Lewis A. Coser, *Masters of Sociological Thought*, second edition, 1977, p. 476.
11) 鈴木広編『コミュニティ・モラールと社会移動の研究』，アカデミア出版会，1978.
12) ソローキンの移動効果の視座から，その研究動向を再整理とした論文として，篠原隆弘「都市化社会における移動型生活構造の分析——研究の主たる動向——」，鈴木広編『現代社会の人間的状況』，アカデミア出版会，1975，所収。
13) R. Boudon, "Social Mobility in Utopia", (1970), in A. P. M. Coxon and C. L. Jones (eds.), op. cit., p. 298.
14) J. H. Goldthorpe, op. cit., pp. 1-37. Milton M. Gordon, *Social Class in American Sociology*, 1950. Philip J. Allen, ed., op. cit.
15) わが国においては，ソローキンの社会移動論や，彼の社会学思想自体がいまだ正面きってとり上げられていない。戦後書かれた山本登の論文「社会移動の概念」（前出）もソローキン批判の所説を中心としているが，移動概念をめぐる論議に終始したもので，ソローキンの移動論の全体像をとらえているとはいえない。わが国の戦前・戦中期における柳田国男，高田保馬，戸田貞三，林恵海，米林富男，小山隆，鈴木栄太郎，前田一，藤林敬三，野尻重雄などによる諸研究を再検討しておくことは充分意味のあることであると考える。川合隆男「戦後日本の社会移動研究——その展開と諸問題——」『法学研究』（慶大法学部），1981年6月号，55-81頁，も参照されたい。